

# ベースラインの設定（設定の考え方）

2023年度申請範囲

別紙2

- ・プロジェクト対象範囲（郷ノ浦地区）では、平成30年～令和元年度に深刻な磯焼け状態となった。  
※ **p.15～17 参照** なお、プロジェクト対象範囲の設定については**p.13**に示す。
- ・令和元年度に壱岐市では「磯根資源回復促進事業」を創設し、漁業活動中に捕獲したイスズミに補助金を出し、積極的な漁獲を促している。 ※ **イスズミ駆除効果は p.14 参照**
- ・令和2年度に「壱岐市磯焼け対策協議会」を設立し、「イスズミハンター（捕獲員）雇用事業」において、本格的なイスズミ駆除を開始した。
- ・したがって、**令和元年度時点の藻場範囲におけるCO2吸収量をベースライン**とする。
- ・既往調査結果等を用いてプロジェクト実施前後の比較（Before-After）、プロジェクトを実施した場所と実施していない場所との比較（Control-Impact）を示す。 ※ **p.5～7 参照**

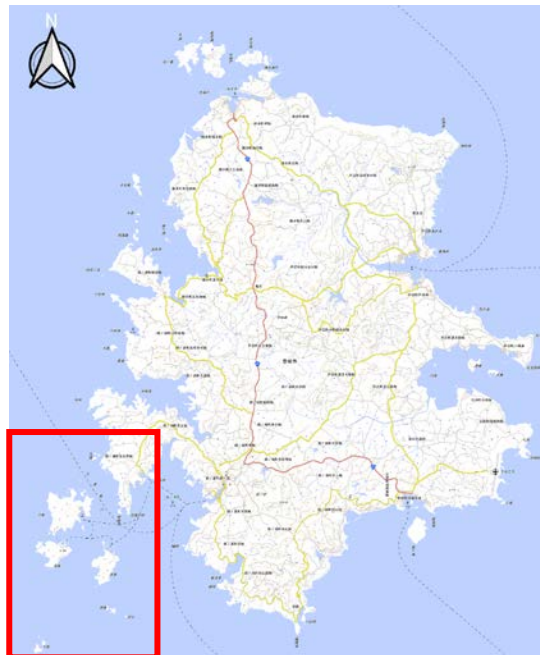


表2-1 ベースライン設定の根拠資料

既往資料	年月	プロジェクト対象範囲内		プロジェクト対象範囲外		藻場分布図	備考
		被度	写真	被度	写真		
環境省藻場調査	平成30年～令和2年	×	×	×	×	△	H26～30年撮影の衛星画像とR1～R2年の代表地点での現地調査に基づき整備。精度検証結果は正解率約60%。
水産試験場藻場調査	令和元年6月	○	○	○	○	×	プロジェクト実施前（Before）
〃	令和5年3月	○	○	×	×	×	プロジェクト対象範囲内の実施後（After）
令和5年7月坪刈り調査	令和5年7月	△	△	○	○	×	プロジェクト対象範囲外の実施後（After）
アワビに適した藻場環境と植食性魚類の行動について※	平成30年9月	×	△	×	△	×	郷ノ浦地区の平成13～30年の藻場の変化（磯焼けの状況） ※平成30年9月4日壱岐地区磯焼け対策会議資料

○：資料あり ×：資料なし △：資料はあるが精度が低い

図2-1 プロジェクト対象範囲（郷ノ浦地区）

# ベースラインの設定（算定方法）

- ・ベースラインの藻場範囲はプロジェクト実施前の藻場範囲とするが、令和元年6月の水産試験場藻場調査ではUAVでの空撮は実施しておらず、藻場範囲を明示する藻場分布図がない。※ **p.1 参照**
- ・このため、申請対象の藻場範囲から、環境省藻場調査（平成30年～令和2年）以降に回復したと想定される藻場を除く範囲をベースラインの藻場範囲とし、**223.16ha**とした。※ **p.3 参照**
- ・被度は、令和元年6月の水産試験場藻場調査結果より**平均被度（9.156%）**と算定した。※ **p.4 参照**
- ・藻場範囲と平均被度より実勢面積を算定した。 ※**表2-2 参照**
- ・吸収係数の設定に必要な各要素（単位面積あたりの乾燥重量、P/B比、炭素含有率、残存率①②、生態系全体への換算係数）は、申請対象と同じとした。 ※**別紙3 参照**
- ・ベースラインにおけるCO2吸収量は、**105.767 t -CO2/年**※とする。

表2-2 ベースラインのCO2吸収量

地点	①	②	③ = ①*2	④	⑤ = ④/1000*10000	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬ = ③*⑫
	対象生態系の分布面積 (ha)	被度 (%)	実勢面積 (ha)	単位面積あたりの乾燥重量 (kg/m <sup>2</sup> )	単位面積あたりの乾燥重量 (t/ha)	P/B比	炭素含有率	44/12	残存率①	残存率②	生態系全体への換算係数	単位面積あたりの吸収量 (t-CO2/ha/年)	CO2吸収量 (t-CO2)
本土北側	54.70	9.156	5.00	1.644	16.44	1.53	0.32	3.667	0.0472	0.0499	1.5	4.29	21.450
大島	55.16	9.156	5.05	1.633	16.33	1.53	0.32	3.667	0.0472	0.0499	1.5	4.26	21.513
長島	12.27	9.156	1.12	1.262	12.62	1.53	0.32	3.667	0.0472	0.0499	1.5	3.29	3.684
原島	30.54	9.156	2.79	3.124	31.24	1.53	0.32	3.667	0.0472	0.0499	1.5	8.16	22.766
机島	53.32	9.156	4.88	1.931	19.31	1.53	0.32	3.667	0.0472	0.0499	1.5	5.04	24.595
平島	17.17	9.156	1.57	2.867	28.67	1.53	0.32	3.667	0.0472	0.0499	1.5	7.49	11.759
計	223.16		20.41	12.461	124.61								105.767

# ベースラインの設定（藻場範囲）

面積

■: 182.46 ha (a)

■: 94.10 ha (b)



図2-2

面積

■: 53.40 ha (c)

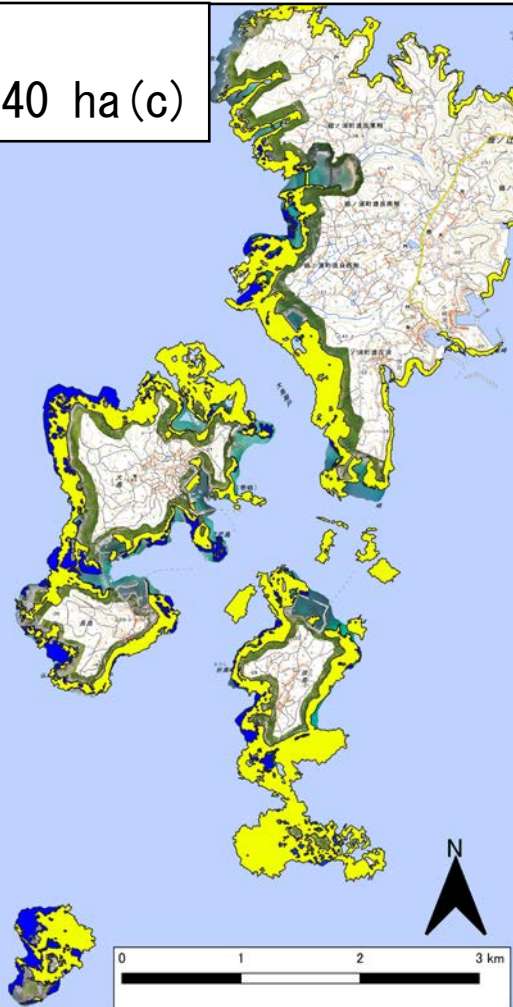


図2-3

ベースライン面積

$$= a + b - c$$

$$= 182.46 + 94.10 - 53.40$$

$$= 223.16 \text{ (ha)}$$

a : UAVオルソ画像から視認できた藻場面積【図2-2】

b : UAVオルソ画像よりも海側の藻場面積(環境省藻場調査)【図2-2】

c : 環境省藻場調査以降、回復したと想定される藻場面積【図2-3】

2023年度申請範囲



表2-3 平均被度

測線	被度 (%)						区間延長	区間延長 × 被度
	キレバモク	ツクシモク	ノコギリモク	マメタワラ	ヨレモク類	計		
0					15	15	10	150
10					37.5	37.5	2.5	93.75
12.5					2.5	2.5	2.5	6.25
15					37.5	37.5	2.5	93.75
17.5					2.5	2.5	2.5	6.25
20					2.5	2.5	10	25
30					15	15	10	150
40					2.5	2.5	2.5	6.25
42.5					2.5	2.5	2.5	6.25
45					15	15	2.5	37.5
47.5					2.5	2.5	2.5	6.25
50					15	17.5	10	175
60		2.5			15	17.5	10	175
70			2.5		15	17.5	10	175
80					15	17.5	10	175
90	2.5				15	17.5	10	175
100					15	15	10	150
110					2.5	2.5	10	25
120					2.5	2.5	10	25
130			2.5		2.5	5	10	50
140		2.5		2.5	2.5	7.5	10	75
150		2.5			2.5	5	10	50
160					2.5	2.5	10	25
170		2.5			2.5	5	10	50
180		2.5			2.5	5	10	50
190					2.5	2.5	10	25
200					2.5	2.5	10	25
計						200	1831.3	

被度（荷重平均） 9.156 %

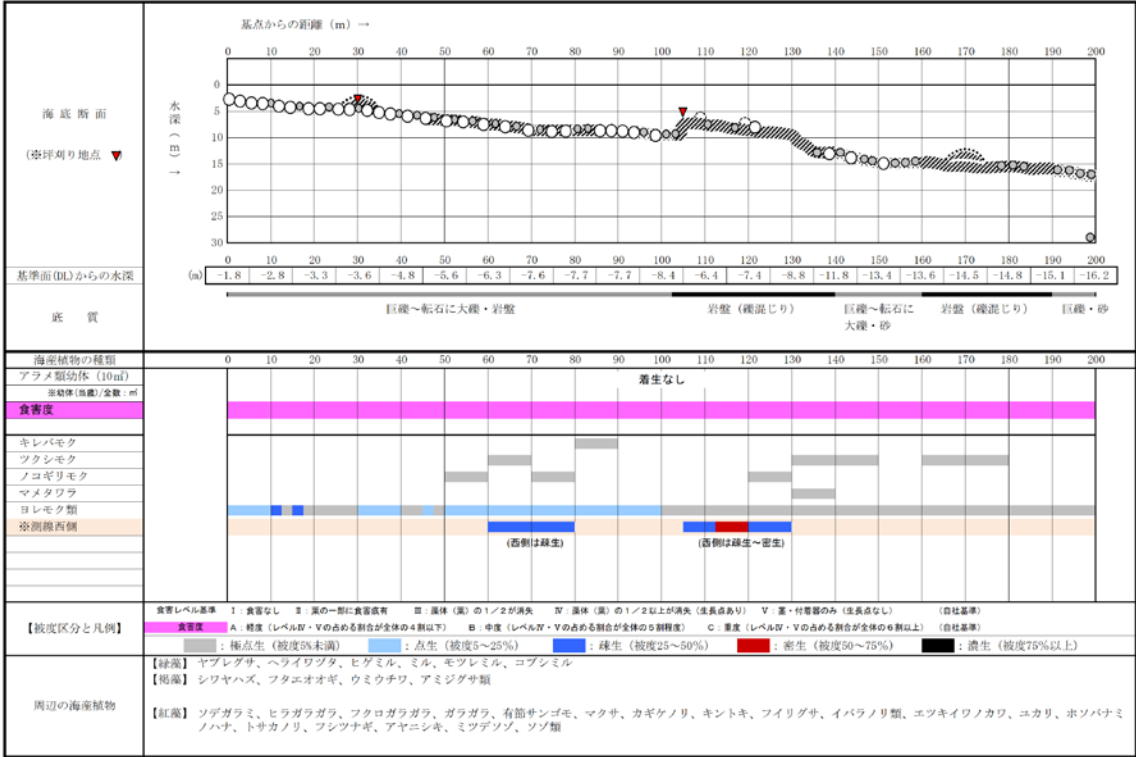


図2-4 海底断面と植生被度（R1/6/28）

出典：令和元年年6月水産試験場藻場調査

# ベースラインの設定（Before-After：プロジェクト対象範囲内）

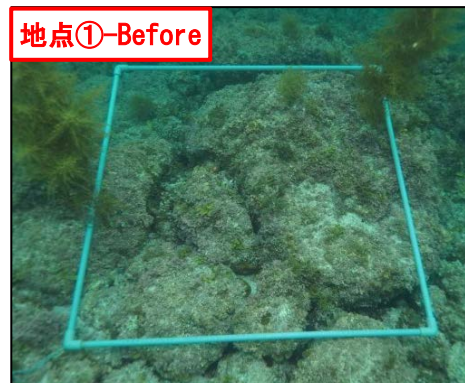
2023年度申請範囲



## 【プロジェクト実施前：令和元年6月水産試験場藻場調査】

下図の2箇所で磯焼け状態が確認されていた（地点①,②）。

地点①-Before



地点②-Before



## 【プロジェクト実施後：令和5年3月水産試験場藻場調査】

下図の2箇所で藻場の回復が確認されている（地点①,②）。

地点①-After



地点②-After

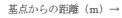


## 別紙2

## プロジェクト外対象範囲



万ノ満20  
(6/28)

[illegible]

**基準** Ⅰ: 安全なⅡ: 実の部に入食育有 Ⅲ: 実の1/2が消失 Ⅳ: 実の1/2以上が消失 (生長差あり) Ⅴ: 茎・付着葉のみ (生長差なし) (自給基準)  
**判定** A: 経度 (レベルⅢ・Ⅳ) の占める割合が全体の4割以下 B: 中度 (レベルⅣ・Ⅴ) の占める割合が全体の5割程度 C: 重度 (レベルⅢ・Ⅳ) の占める割合が全体の6割以上 (自給基準)  
 ・極点生 (被度5未満) ・点生 (被度5～25%) ・疎生 (被度25～50%) ・密生 (被度50～75%) ・濃生 (被度75%以上)

【A】アミモロウ、チャシオグサ、ヒゲミル、サキブトミル、ナガミル、ミル、モツレミル、フクロミル、クロミル、緑藻類  
 【B】ヘラヤハズ、シワヤハズ、フタエオオギ、サナダグサ、ウミウチウ、アミジグサ類、イチメガサ、ケヤリ  
 【C】ヒラガラガラ、ガラガラ、有節サンゴモ、マクサ、キントキ、エツキイワノカワ、ユカリ、ホソバナミノハナ、トサカノリ

被度 (荷重平均)

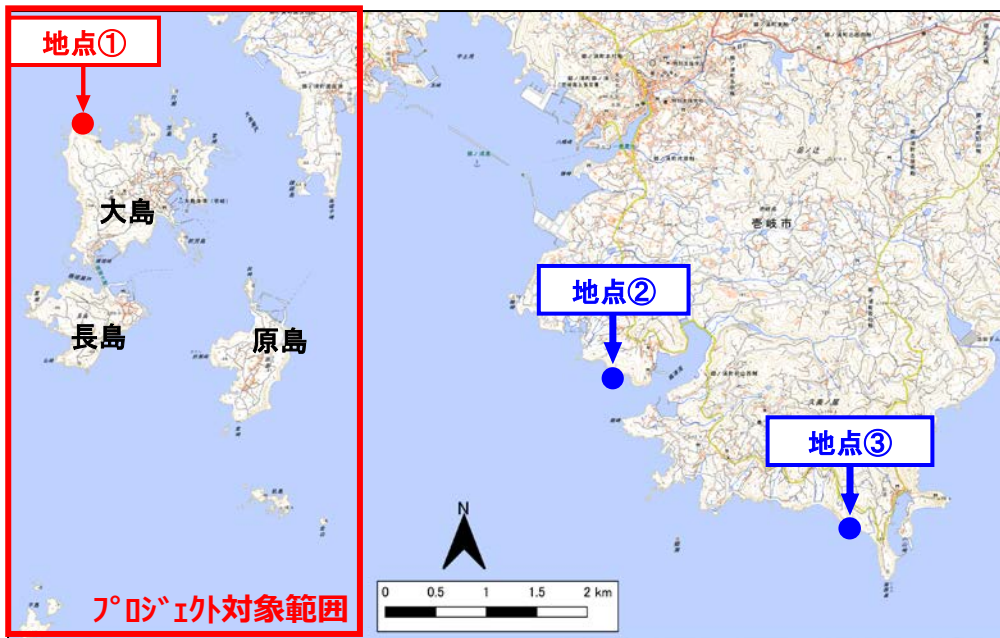
**6.125** %

計

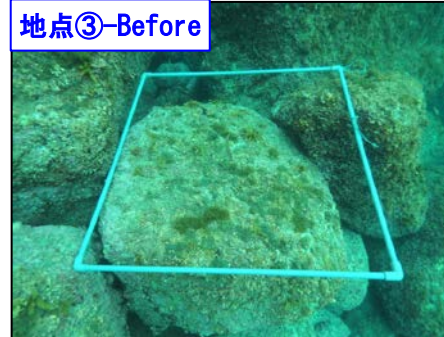
200	1225
-----	------

出典：令和元年6月水産試験場藻場調査

# ベースラインの設定 (Before-After : プロジェクト対象範囲外)

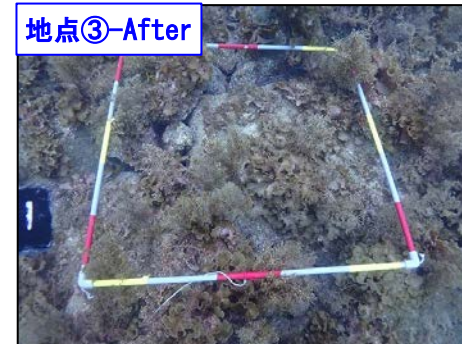


【プロジェクト実施前：  
令和元年6月  
水産試験場藻場調査】



磯焼け状態が確認されていた  
(地点③-Before)。

【プロジェクト実施後：  
令和 5年7月  
坪刈り調査】

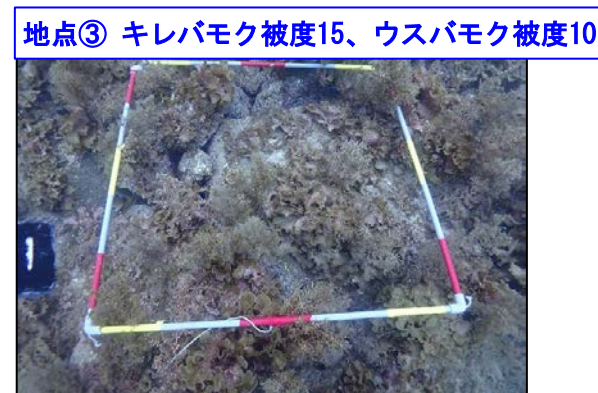
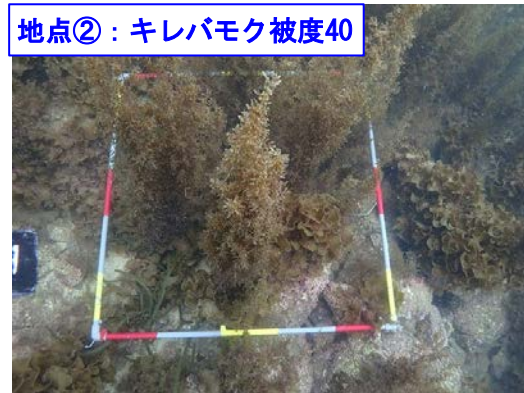
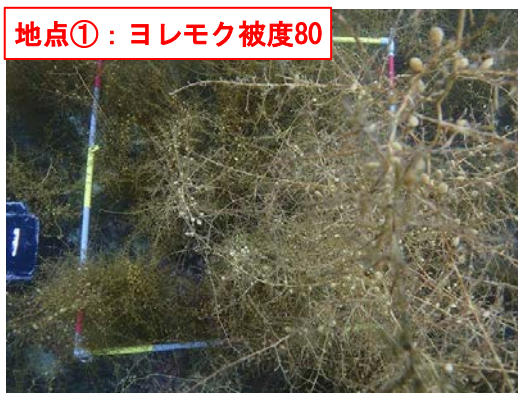


著しい藻場の回復は確認され  
ていない(地点③-After)。

2023年度申請範囲

【プロジェクト実施後：令和5年7月 坪刈り調査】

プロジェクト対象範囲(地点①)に近い地点(地点②)では被度40程度まで回復しているが、更に離れた地点(地点③)では被度10~15程度で回復の度合いが低い。



# ベースラインの設定（設定の考え方）

2024年度新規申請範囲

- ・プロジェクト対象範囲（郷ノ浦地区）では、平成30年～令和元年度に深刻な磯焼け状態となった。  
※p.10～12 参照 なお、プロジェクト対象範囲の設定についてはp.13に示す。
- ・令和元年度に壱岐市では「磯根資源回復促進事業」を創設し、漁業活動中に捕獲したイスズミに補助金を出し、積極的な漁獲を促している。 ※イスズミ駆除効果はp.14 参照
- ・令和2年度に「壱岐市磯焼け対策協議会」を設立し、「イスズミハンター（捕獲員）雇用事業」において、本格的なイスズミ駆除を開始した。
- ・したがって、**令和元年度時点の藻場範囲（平成30年～令和元年環境省藻場調査）におけるCO2吸収量をベースライン**とする。
- ・既往調査結果等を用いてプロジェクト実施前後の比較（Before-After）、プロジェクトを実施した場所と実施していない場所との比較（Control-Impact）を示す。 ※p.11～12 参照



表2-5 ベースライン設定の根拠資料

既往資料	年月	プロジェクト対象範囲内		プロジェクト対象範囲外		藻場分布図	備考
		被度	写真	被度	写真		
環境省藻場調査	平成30年～令和2年	×	×	×	×	△	H26～30年撮影の衛星画像とR1～R2年の代表地点での現地調査に基づき整備。精度検証結果は正解率約60%。
水産試験場藻場調査	令和元年6月	○	○	×	×	×	プロジェクト実施前（Before）
令和6年6月 坪刈り調査	令和6年6月	○	○	×	×	×	プロジェクト対象範囲内の実施後（After）
令和5年7月 坪刈り調査	令和5年7月	○	○	○	○	×	プロジェクト対象範囲外の実施後（After）
アワビに適した藻場環境と植食性魚類の行動について※	平成30年9月	×	△	×	△	×	郷ノ浦地区の平成13～30年の藻場の変化（磯焼けの状況） ※平成30年9月4日壱岐地区磯焼け対策会議資料

○：資料あり ×：資料なし △：資料はあるが精度が低い

図2-6 プロジェクト対象範囲（郷ノ浦地区）

# ベースラインの設定（算定方法）

2024年度新規申請範囲

別紙2

- ・ベースラインの藻場範囲はプロジェクト実施前の藻場範囲とするが、令和元年6月の水産試験場藻場調査ではUAVでの空撮は実施しておらず、藻場範囲を明示する藻場分布図がない。※ **p.1 参照**
- ・このため、環境省藻場調査（平成30年～令和2年）で示されている範囲をベースラインの分布面積とし、**156.4ha**とした。
- ・被度は、令和元年6月の水産試験場藻場調査結果より**平均被度（6.125%）**と算定した。※ **p.10 参照**
- ・藻場分布面積と平均被度より実勢面積を算定した。 ※**表2-6 参照**
- ・吸収係数の設定に必要な各要素（単位面積あたりの乾燥重量、P/B比、炭素含有率、残存率①②、生態系全体への換算係数）は、申請対象と同じとした。 ※**別紙3 参照**
- ・ベースラインにおけるCO2吸収量は、**23.983 t -CO2/年**※とする。

表2-6 ベースラインのCO2吸収量

地点	①	②	③ = ①*2	④	⑤ = ④/1000*10000	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬ = ③*⑫
	対象生態系の 分布面積 (ha)	被度 (%)	実勢面積 (ha)	単位面積 当たりの 乾燥重量 (kg/m <sup>2</sup> )	単位面積 当たりの 乾燥重量 ( t /ha)	P/B比	炭素含有率	44/12	残存率①	残存率②	生態系全 体への換 算係数	単位面積 あたりの 吸収量 (t-CO2/ha/年)	CO2吸収量 (t-CO2)
本土2024 (St.18)	25.56	6.125	1.56	1.272	12.72	1.50	0.32	3.667	0.0472	0.0499	1.5	3.26	5.085
本土2024 (St.19,20)	99.85	6.125	6.11	1.260	12.60	1.10	0.32	3.667	0.0472	0.0499	1.5	2.36	14.419
本土2024 (St.21,22)	30.99	6.125	1.89	1.266	12.66	1.10	0.32	3.667	0.0472	0.0499	1.5	2.37	4.479
計	156.40		9.56	3.798	37.98								23.983

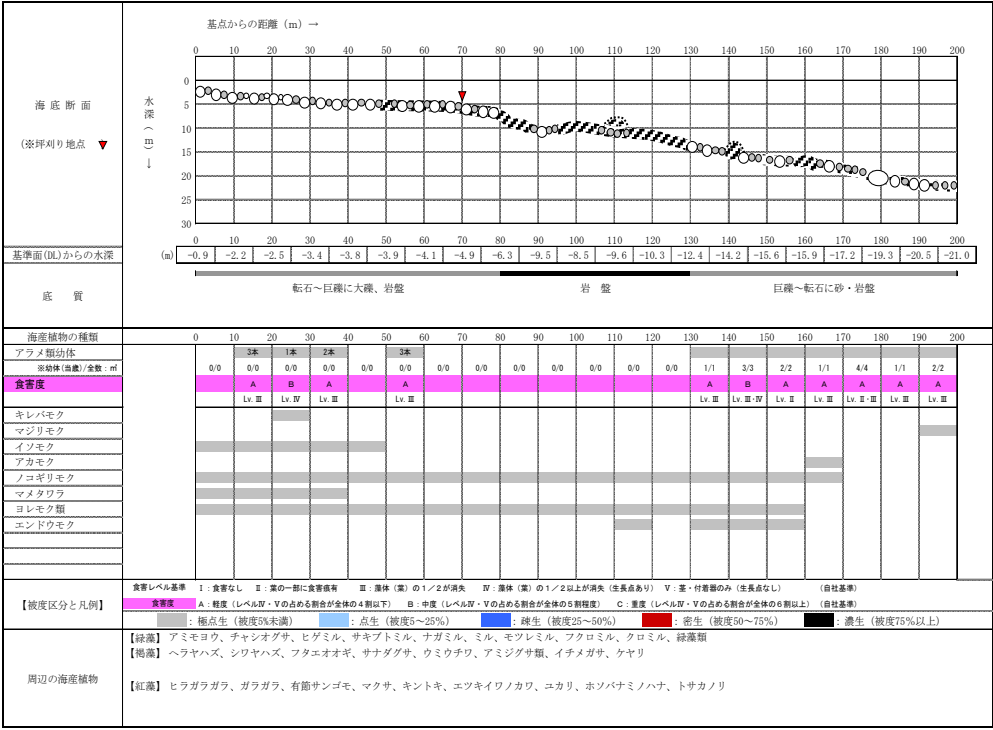
# ベースラインの設定（被度）

プロジェクト対象範囲



2024年度新規申請範囲

表2-7 平均被度



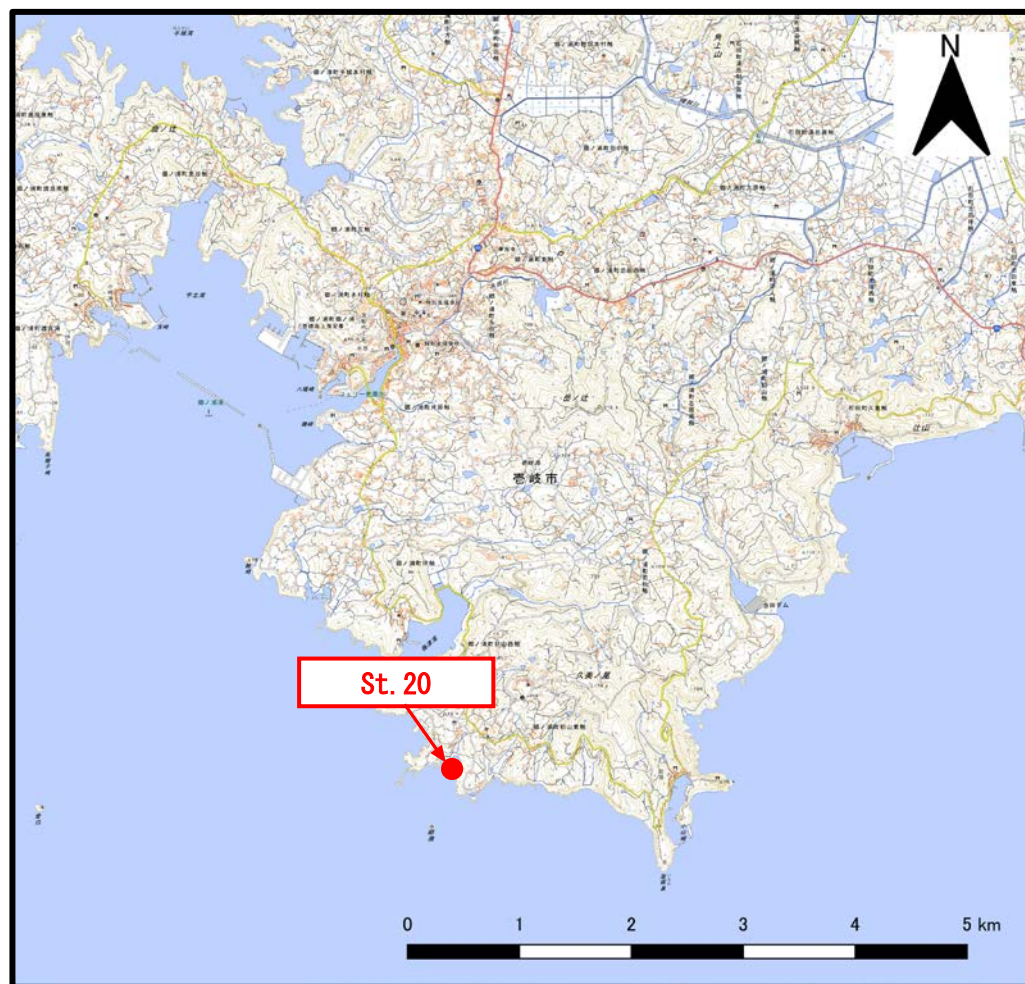
測線	被度 (%)								区間延長	区間延長 ×被度
	キレバモク	マジリモク	イソモク	アカモク	ノコギリモク	マメタワラ	ヨレモク類	エンドウモク		
0										
10			2.5		2.5	2.5	2.5		10	100
20			2.5		2.5	2.5	2.5		10	100
30	2.5		2.5		2.5	2.5	2.5		10	125
40			2.5		2.5	2.5	2.5		10	100
50			2.5		2.5		2.5		10	75
60					2.5		2.5		10	50
70					2.5		2.5		10	50
80					2.5		2.5		10	50
90					2.5		2.5		10	50
100					2.5		2.5		10	50
110					2.5		2.5		10	50
120					2.5		2.5	2.5	10	75
130					2.5		2.5		10	50
140					2.5		2.5	2.5	10	75
150					2.5		2.5	2.5	10	75
160					2.5		2.5	2.5	10	75
170				2.5	2.5				10	50
180									10	0
190									10	0
200		2.5							10	25
計									200	1225

被度（荷重平均） **6.125** %

図2-7 海底断面と植生被度（R1/6/28）

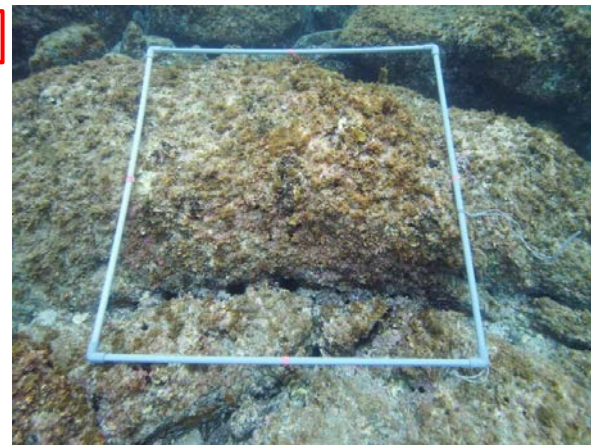
# ベースラインの設定（Before-After：プロジェクト対象範囲内）

2024年度新規申請範囲



【プロジェクト実施前：令和元年6月水産試験場藻場調査】

St. 20 - Before

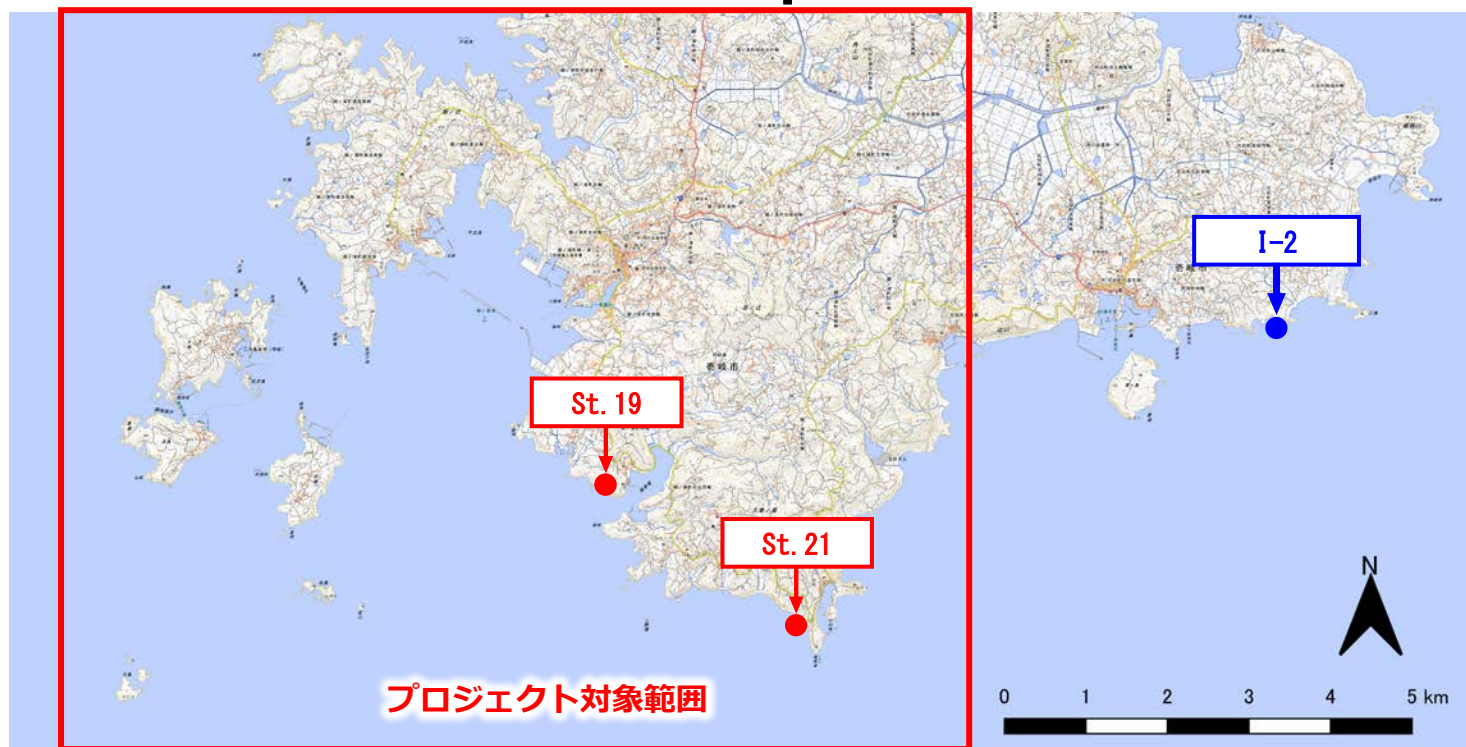


【プロジェクト実施後：令和6年6月 坪刈り調査】

St. 20 - After



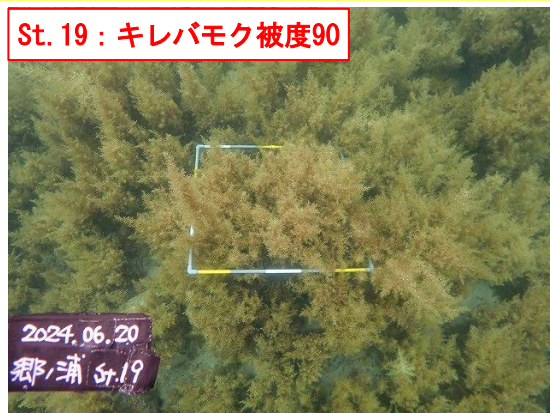
# ベースラインの設定 (Control-Impact)



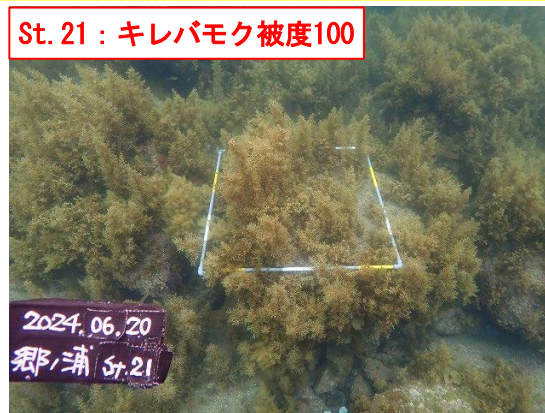
【プロジェクト実施後：令和6年6月 坪刈り調査 令和5年7月 坪刈り調査】

プロジェクト対象範囲 (St. 19, St. 21) では被度90程度まで回復しているが、対象範囲外 (I-2) では被度20程度と低い。

St. 19 : キレバモク被度90



St. 21 : キレバモク被度100



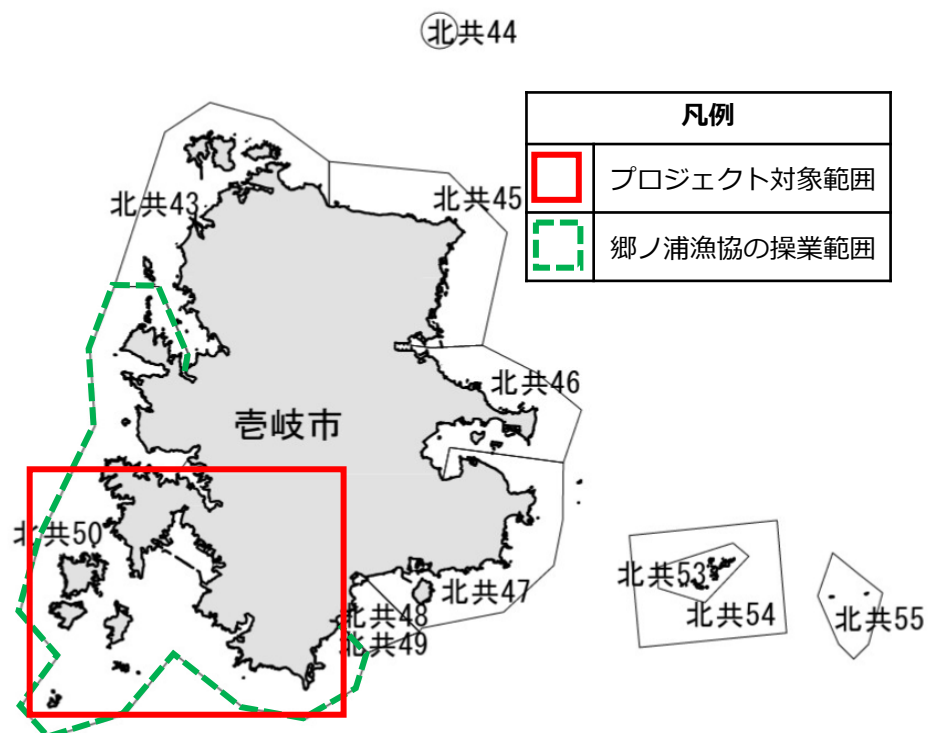
I-2 : ウスバモク被度20



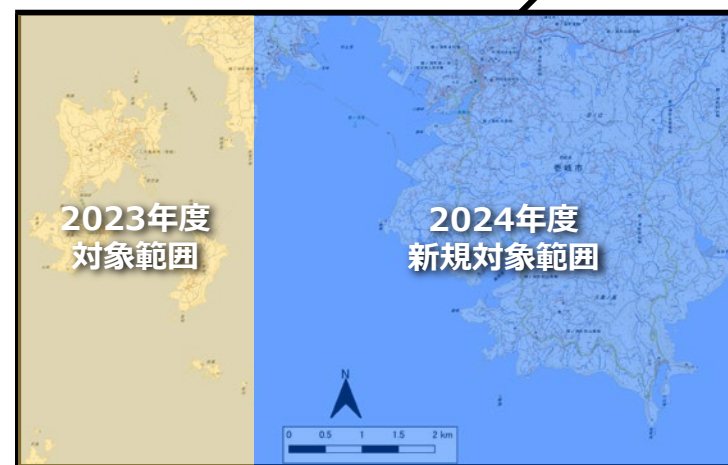
# プロジェクト対象範囲の設定

- ・本プロジェクトは、主に郷ノ浦漁協の共同漁業権範囲において実施しているが、イスズミ（魚類）の駆除を対象としているため、明確な影響範囲を示すことは困難である。
- ・このため、昨年度の対象範囲に郷ノ浦港以东（嫦娥～若松）までを加えた範囲を、今年度のプロジェクト対象範囲とした。
- ※今年度、新たに対象範囲としたエリアにおいても、坪刈り調査により藻場の回復を確認している。
- ・なお、本プロジェクトの効果は、対象範囲を越えて広く波及しているものと推測する。

プロジェクト対象範囲



出典：長崎県北部海区共同漁業 漁場計画連絡図



2023年度 郷ノ浦漁協 イスズミハンター活動実績

	活動回数		イスズミ捕獲数	
	回/年	%	匹/年	%
三島・渡良・初山周辺	326	88%	2206	80%
その他	36	10%	497	18%
不明	9	2%	47	2%
計	371	100%	2750	100%

■藻場の回復が確認されている範囲（プロジェクト範囲）

# プロジェクト実施による効果

- ・イスズミ駆除によって守られた約1,370トンの海藻が、核藻場として周囲に種を着床させ繁茂したことによって、今回の申請量まで藻場が回復した。

本プロジェクトでのイスズミ駆除の実績

単位：匹

	磯根資源回復促進事業	磯焼け対策協議会	年度計
令和元年度	5,194	－	5,194
令和2年度	1,643	2,026	3,669
令和3年度	1,757	7,984	9,741
令和4年度	1,598	6,462	8,060
令和5年度	961	2,926	3,887
合計	11,153	19,398	<b>30,551</b>

イスズミの生態

イスズミの平均体重	3kg	大きい個体は5kgを超える
イスズミが1日に食べる量	体重の5%	西海区水産研究所報告より
イスズミの摂食日数	300日	水温15度以下で活動が鈍くなる

5年間のイスズミ駆除により守られた海藻の量

➡  $3\text{kg} \times \text{体重の}5\% \times 30,551\text{匹} \times 300\text{日} = \text{約} \mathbf{1,370\text{トン}}$

※イスズミの寿命は約45年間であるため、

今年も来年も再来年もその先も、継続して海藻が守られる。

# 参考：郷ノ浦地区の磯焼けについて

出典： H30. 9. 4 壱岐地区磯焼け対策会議資料（抜粋）

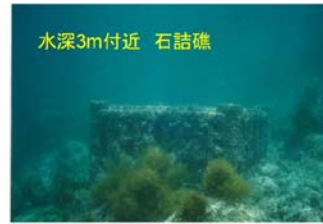
「アワビに適した藻場環境と植食性魚類の行動について」 国立研究開発法人 水産研究・教育機構 西海区水産研究所

## 1. 藻場の変化について

郷ノ浦町西部における調査開始時の状況（平成13年7月）



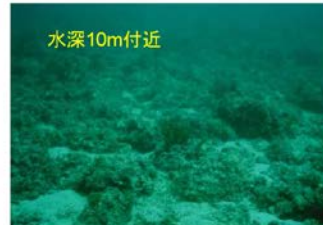
水深2m付近 アラメ



水深3m付近 石詰礁

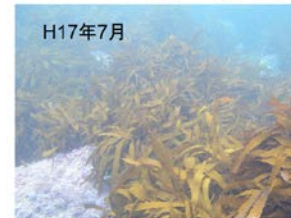
- ・水深2m以浅にはアラメがあった。
- ・水深3m付近の石詰礁周辺にはノコギリモクがあった。
- ・水深5m以深はアラメ・カジメ類、ホンダワラ類はなかった。

平成10年のアラメ・カジメ類の消失の影響が残っていた？



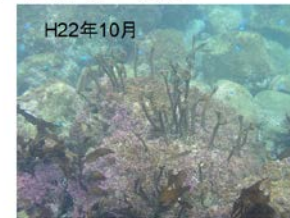
水深10m付近

## 郷ノ浦町西部における藻場の変化



H17年7月

このころまでにアラメ場が回復



H22年10月

H22年夏季の高水温で成体が激減



H23年5月

幼体が加入し、アラメ場が回復



H25年3月

魚の食害で短くなるが、春には回復

## 郷ノ浦町西部における藻場の変化



H25年8月

H25年夏季の高水温で異常発生



H25年12月

H25年冬までに成体消失



H26年6月

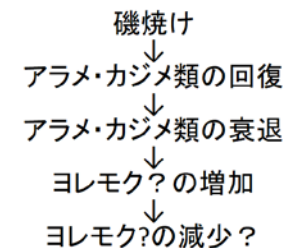
H26年ヨレモク？繁茂



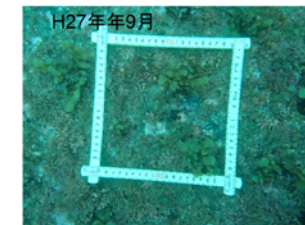
H30年5月

H26年ヨレモク？減少？

## 郷ノ浦町西部における藻場の変化



アラメ・カジメ類：周年、茂っている。  
ヨレモク？：夏以降、小さくなる。



H27年年9月

# 参考：郷ノ浦地区の磯焼けについて

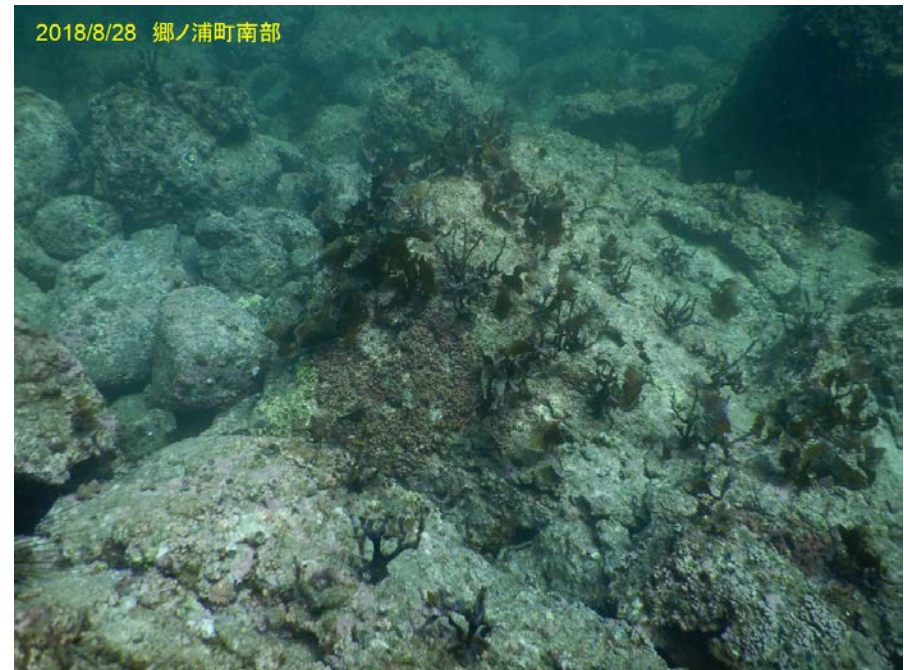
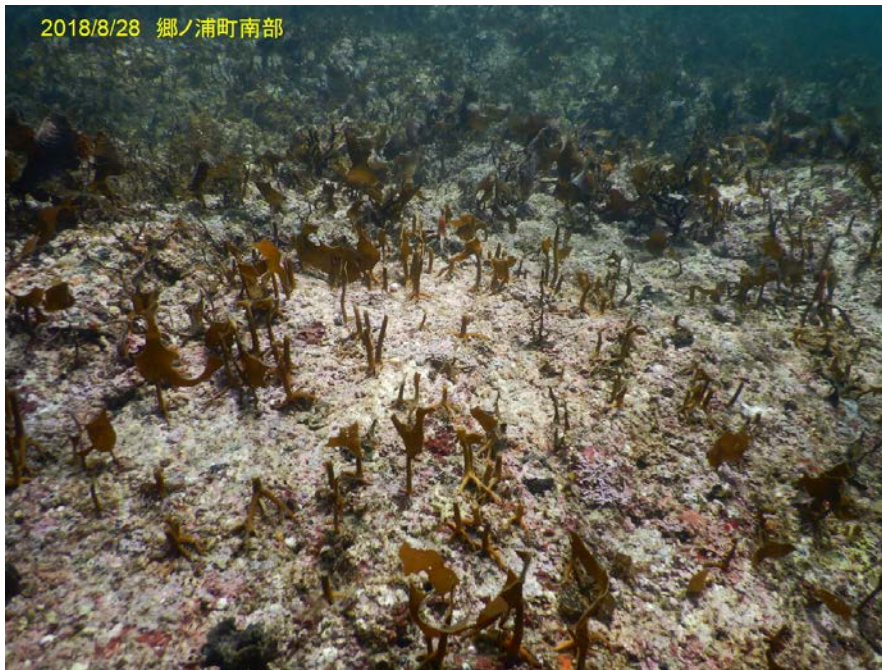
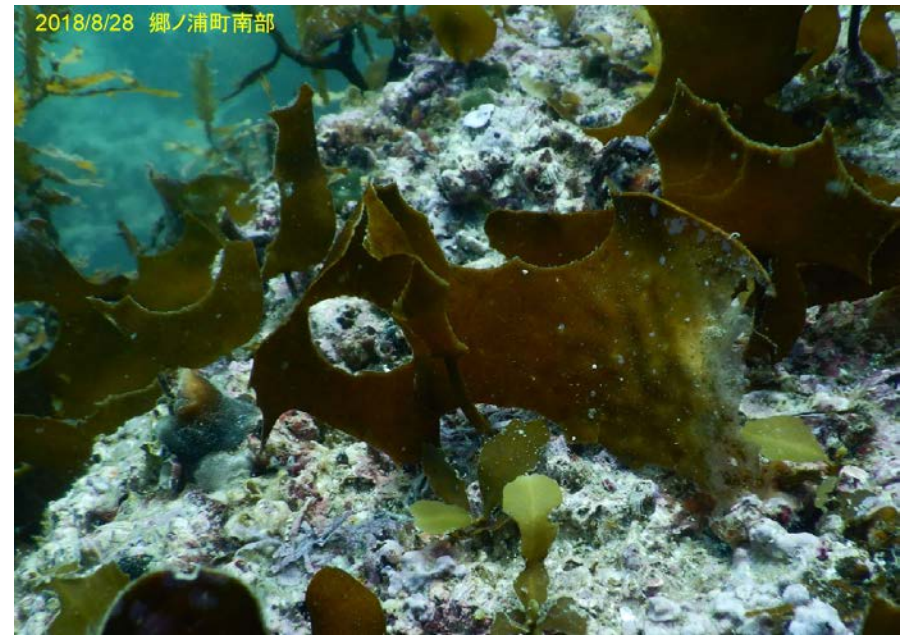
郷ノ浦町南部の海藻の状態(H30年1月30日)



# 参考：郷ノ浦地区の磯焼けについて

## 壱岐の藻場の現状と今後

- 平成25年以降、夏季の高水温の度に、着実に北から藻場が消失している。
- 現状では海豚鼻を境に西ではアラメ・カジメ類の成体はなく、ワカメも食害により生育できない状態。
- 魚類の食害が激しくなる秋季に、
  - アラメ・カジメ類が幼体のみに残っている海域で藻場が消失する可能性がある。
  - これまで被害の少なかった南東部で食害が激しくなる可能性がある。



## 参考：プロジェクトの実施効果

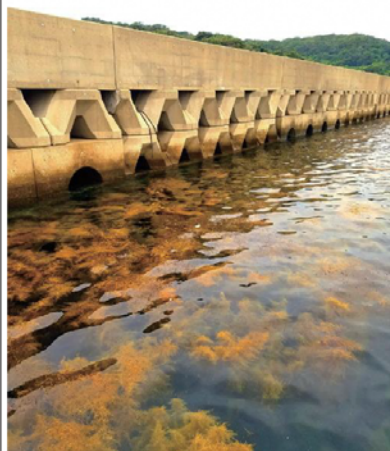
(1) 【第458号】

平成26年2月27日 第三種郵便物承認

彦岐新聞

THE IKI SHINBUN

2021年(令和3年)7月9日発行 金曜日(週刊)



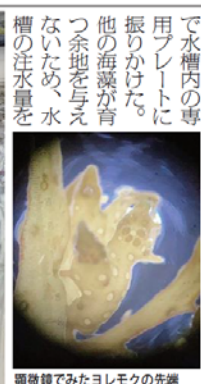
海面を覆うヨレモク(大島東側沖防波堤付近)

平成11年以  
て、ヨレモクは多年生で、  
数年〜数十年間生き、  
1年を通じて藻場を形  
成する「四季藻場」の  
重要な指標とされる。  
暖海性で、夏場の高水  
温にも耐えることがで  
きるという。食害にも  
強く、茅を食べられて  
も根さえ残れば再度生  
えてくる。群生すれば  
イカの産卵場となっ  
たり、魚の棲みかとな  
る。陸上のいけすや  
海中に種苗ブロックを  
設置するなど、種苗生  
産体制の構築を図り、  
三島周辺にも種苗フレ  
ーを設置していた。  
群生した要因は不明  
だが、山仲洋紀所長は  
「イスズミや  
ウニの駆除が  
実を結んだ可  
能性がある。  
昨年の冬は海  
水温が14℃を  
下回り、イス  
ズミの摂食行  
動が鈍り食害  
が抑えられた  
ことも考えら  
れる」と見て  
いる。

降、20年間藻場がな  
った大島東側の灯台付  
近でも群生している様  
子が見られている。山  
仲所長によると今回群  
生している藻場は「ヨ  
レモク」に分類される  
ものの、色や形状、成  
熟時期などが磯焼け前  
のものとは異なること  
から、現在の海水温  
などの環境に適するた  
めに変異した可能性も  
ある。



水槽を洗浄する濱野さん

顕微鏡でみたヨレモクの先端  
丸く見えるのが卵(濱野さん提供)

イスズミ駆除奏功?  
種苗が各漁協へ  
市はこれまでイスズ  
ミを買い取って駆除を  
強化。過去2年間で約  
9千匹を駆除してき  
た。  
過去の調査でイスズ  
ミは海岸線沿いに移動  
する傾向があることが  
分かっており、三島周  
辺のイスズミを駆除し  
たことで、他の海域か  
らの移入がなく、三島  
周辺のイスズミが減っ  
ているとの見方もある。  
同センターは本年  
度、ヨレモク200枚  
と南方系のキレバモク

ヨレモクの卵は、昨  
年採取していたヨレモ  
クの母藻から採ってい  
る。春から初夏にかけ  
て成熟(産卵)を迎  
え、週に1回程度、陸  
上のいけすで産卵した  
卵を採っている。6月  
30日には同センター  
勤務の地域協力し協  
力隊、濱野陽平さん  
(28)が山仲所長と採  
卵作業を行った。桶に  
入れたヨレモクから直  
径0.2mmの卵110  
万粒を集め、ジョウロ  
で水槽内の専用フレ  
ーに注ぎ入れた。  
他の海域が育  
つ余地を与え  
ないため、水  
槽の注水量を

## 大規模群生は8年ぶり

ホンドワラ類  
ヨレモク

## 三島と渡良一部で藻場回復

郷ノ浦町の三島周辺海域と姫城島からツインスピーチまでの海岸  
一帯で、ホンドワラ類の海藻「ヨレモク」を主体とした藻場が繁茂  
していることが、彦岐栽培センターへの取材でわかった。彦岐周辺  
海域はこれまで、海水温の上昇や魚による食害などで藻場が消失す  
る磯焼けが深刻化していた。ヨレモクはこれまで三島周辺に限定す  
るに自生していたが、今回の海岸線を覆うほどの藻場の群生は、夏場  
に水温が30℃を超えて急激に磯焼けが拡大した2013年以来8年  
ぶりと見られる。すでにその群生にはアオリイカの産卵が確認され  
ており、藻場回復の第一歩が始まっている。



発行所 彦岐新聞社  
(株式会社アットマーク内)  
〒811-5132 長崎県彦岐市  
郷ノ浦町東触 942-1  
TEL 0920-48-1860  
FAX 0920-48-1265  
購読料 1ヵ月 1,100円(税込)  
毎週金曜日発行  
代表 山内武志  
編集長 高瀬正俊

**生前整理 遺品整理**  
お任せください!!  
彦岐市内、市外の皆様の会社  
お気軽にご相談ください  
USE'S WORLD  
株 ワセスワールド  
まずはお電話を  
0120-86-506-8

100枚の種苗フレ  
ーを生産。ヨレモクの

母藻から採卵↓プレートに  
協力隊の濱野さん地道に手入れ



プレート表面を覆う育つヨレモク

調節したり、ヨレモク  
の卵を密に付ける必要  
があるという。水槽に  
はヨレモク以外の海藻  
も繁殖するため、濱野  
さんは日々、水槽とフ  
レーを清掃し、成長  
を観察している。  
濱野さんは「漁業者  
によるウニやイスズミ  
の駆除、冬の海水温  
種の供給などが相ま  
って郷ノ浦の一部では  
ヨレモクが増えつつあ  
る。彦岐島全体に分布  
させたい」と思い、今年  
5月にまた繁殖してい  
ない場所にも母藻を投入  
しました。漁協や漁業  
者と協力し合い、水産  
資源の回復を目指しま  
す」と話した。